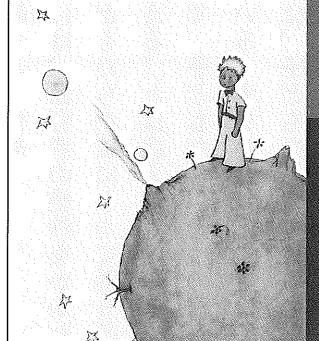


## 星の王子さま

サン=テグジュペリ作  
内藤 澄訳



『星の王子さま』 岩波少年文庫 001  
サン=テグジュペリ作 内藤 澄訳  
(岩波書店 2000年)

## 『星の王子さま』

サン=テグジュペリ作

評者

高橋洋代  
(大学教員)

成人し、民間航空機のパイロットとなつた彼は、郵便飛行に従事し、新しいルートの開拓や発展のために力を尽くす。二十七歳の時には、アフリカのキヤツプ・ジユビー飛行場長としての任務を負い、立派にその重責を果たしている。大空を飛行しながらの思索や、砂漠での孤独な時間を通して生み出されたのが『南方郵便機』『夜間飛行』『人間の大地』などの著作である。第二次世界大戦中はフランス軍の偵察飛行パイロットとして従軍していたが、アメリ

一九〇〇年、由緒ある貴族の五人姉弟の長男としてフランスのリヨンで生まれている。四歳になる直前に父が亡くなり、経済的にも支えを失つた一家は、母方の大伯母トリコー伯爵夫人の庇護を受けながら、リヨンのアパルトマンと郊外のサン=モーリス・ド・レマンスの城館で暮らすことになった。そこで母親と姉弟たちと共に四歳から九歳まで過ごした幸せな日々の記憶は、彼の生涯にわたつて命の泉のような存在になっている。

力の参戦を求めて一九四〇年末にニューヨークに亡命した。

事は思い通りに進まず、鬱屈した日々を過ごしていたが、ある時、出版社からクリスマスのための児童書の執筆を依頼されたサン＝テグジュペリは「いつも自分の頭の中にいる少年」を主人公に物語を書くことになる。それが、生涯最後の出版作品となる

Le petit Prince (『星の王子さま』)である。アメリカで一九四二年に出版され、フランスで出版されたのは一九四四年の彼の死の翌年、一九四五五年十一月末であった。日本では、一九五三年に岩波少年文庫の一冊として、内藤灌訳『星の王子さま』(岩波書店)が出版されている。また、翻訳権が切れた二〇〇五年以降、二〇種類を超す新訳が出版され、『星の王子さま』についての読み解きの本も数多く出版され

ている。

私が『星の王子さま』に出会ったのは

▲『星の王子さま』  
オリジナル版  
サン＝テグジュペリ作  
内藤灌訳  
(岩波書店) 2000年)



しかし、なぜ私は五十年以上もの間、『星の王子さま』にこんなに魅了されているのだろう。夏の夜、高原などで満点の星空を見上げた時、ことばを失うような感覚、自分が一瞬無になり、無限の広がりの

大学二年、六〇年安保闘争の年だった。学友たちと、毎日のようにクラス討論を重ね、連日デモに行つて訴えても、社会は何も変わらない。そのような日常の中で、友人から『星の王子さま』を紹介されたのである。一読してすっかり魅了されてしまった。今でも忘ることのできないフレーズがある。

「あんたが、あんたのバラの花をとてもたいせつに思つてるのはね、そのバラの花のために、時間をむだにしたからだよ」(内藤灌訳 一九五三年)。

生きる意味や目的がわからなくて焦つていた当時の私にとって、「時間をむだにする」との価値」というとらえ方がひどく新鮮で、目からウロコが落ちる思いがしたのである。その後、読むたびに新しい発見があり、そばに置いておくだけで安心できるような本になつた。

中に投げ出され、何か大いなるものに包まれているような感覚を覚えることがある。『星の王子さま』を読むたびに感じる世界はそれに似ている。日常の小さな自己を離れて空の高みに誘われるのだ。

『星の王子さま』は、サンリテグジュペリの最後の作品であり、精神的遺書のような思いを込めてこの作品を書いたと言われる。私は今回、謙遜な思いをもつて、『星の王子さま』の中に通奏低音のように響き続ける「かんじんなことは、目に見えない」ということばをキーワードにして、ささやかではあるがこの本を紹介したい。

## 1 「献辞」をめぐって

本を開くと「献辞」がある。まず、親友「レオン・ウェルト」に捧げられ、次に「子どもだったころのレオン・ウェルトに」と書き換えられている。この不思議な「献辞」についてはさまざまな解釈ができるようになる。

サンリテグジュペリは〈人間一般ではなく個々の

人間〉を大切にした人であった。だとしたら、彼にはレオン・ウェルトだけに伝えたいメッセージがあつたのではないか？ それはどのようなものなのだろうか？

「子どもだったころのレオン・ウェルトに」とは、「子どもたち」への献辞だろうか。私は、そうとは思えない。子どもだったころのことを振り返つてほしいと、「だれも、はじめは子どもだった」大人に獻げられたのではないかと考えている。児童書として書かれてはいても、子ども向きの物語ではないように思えるのは、ファンタジーとしての面白さ、胸がワクワクするような冒険、ユーモア、奇想天外の展開などとは無縁の内容だからである。

また、自分の星にいたころの王子と、砂漠に井戸を探し、自分の星に帰っていく王子の姿を比較すると、王子の人間としての成長物語として読むこともできるようと思われる。

『星の王子さま』は、これまでにもさまざま読み解きがなされているように、謎の多い、多面体の

構造を持った物語である。

## 2 パイロットと王子との出会い

物語のプロローグは、パイロットである作者の六歳の時の思い出から始まる。〈ゾウをのみこんでこなしているウワバミ〉の絵を恐ろしいと考える子どもと、外形から帽子を見る大人との違いが示される。そして、この外側「見えるもの」と内側「見えないもの」の世界が、「大人」と「子ども」の対比の中に物語られていく。

六年前、パイロットは砂漠に不時着し、まどろんただ夜明け方に、王子の「ヒツジの絵をかいて」という呼びかけで目を覚ます。彼は、王子にせがまれ、ヒツジを何回も描いたが、王子には見える「箱の中のヒツジ」を、見ることができない。しかし彼は王子との会話から徐々に、王子の星が小惑星B—612で、星にはバラの花と、放つておくと星を破裂させてしまう恐ろしいバオバブの種があることがわかつてくる。そして、そのバオバブを退治するために王

子はヒツジを連れて帰りたかつたことがわかつてくる。そしてこの作者は、王子の星B—612は、数字を信用する大人たちのための表現であり、「ものそのもの、ことそのことが、たいせつ」（内藤濯訳<sup>注1</sup>）、「生きるということの意味がわかつてゐる」（池澤夏樹訳<sup>注2</sup>）、「人間が生きるうえでなにが大切か分かつてゐる」（稻垣直樹訳<sup>注3</sup>）子どもたちには、番号なんかどうでもよく、もっと別の書き方がしたかったのだと言う。数字や箱の外側しか見えない大人と、箱の内側が見え、「ものそのもの、ことそのこと」を大切に考える子どもとの対比がここにある。

ところで、「バオバブ」とは何だらうか？以前、訳者の内藤氏は、「バオバブ」とは「悪い情熱のこと」と言っておられたが、それは「怒り、憎しみ、ねたみ、ひがみ」などの感情だらうか？王子は自分の星で、日に四十四度も日の入りを見たほど悲しい日々を送つていたようだが、バラの花の愛情が信じられなくなり、バオバブの芽を摘むことができなくなつていたからであろう。愛情が信じられなくなる

と、心の中に憎しみ、ねたみ、ひがみなどの感情が生まれるが、王子はそれを退治できないのが悲しかったのだ。星がバオバブの毒氣にあてられていても自分一人では退治できずに悩んでいた王子は、旅の途中、誰かに、「ヒツジはバオバブを食べる」ことを聞いたのだろう。しかし、そのヒツジは王子が愛するバラの花も食べてしまうというのだ。この矛盾に苦しみ、心ふさがれていた王子は、いい加減な対応をしたパイロットに怒りが込み上げ、泣きじやくる。パイロットは、自分の生死がかかっているエンジンの修理を放り出して、泣きだした王子を抱きしめ、なぐさめ、共に泣く。ここに、この本を貫いている〈愛〉の姿が初めて描かれる。

そして王子は、バラの花との出会いと別れ、友だち探しの旅の物語をし始める。

### 3 友だちを求める王子の旅

王子が初めて訪ねた星には王さまが一人で住んでいた。王子は、同じように独りぼっちで住んでいる

「うぬぼれ男」「呑み助」「実業屋」「点燈夫」「地理学者」の星々を訪ね、彼らとことばを交わすが、話は一方通行で間柄が深まることはない。彼ら「へんな」「とつてもおかしい」「まったくかわつてゐる」大人たちは私たちの見本であろう。それらは権力、賞賛、他者の評価、財産、盲目的服従、知識など、外側の「目に見える世界」に価値を置いて生きている。王子は最後に出会った地理学者から、バラの花が「はかない」存在であることを知られ、独りぼっちにしてきたことを思い返しつつ、地球へと向かう。

地球に降り立った王子はなかなか友だちが見つからない中で、五千ものバラの花に出会う。バラの花は世界に一本しかないと思っていた王子は、その一轮のバラと三つの小さな火山しか持っていない自分に絶望し、「ぼくはこれじゃ、えらい王さまなんかになれようがない……」と草の上につつ伏して泣く。そこにキツネが現れる。キツネは、サンリテグジュペリが砂漠の飛行基地キヤップ・ジュビーで飼いならそうとしたフエヌック・キツネがモデルであると

言われるが、この賢いキツネは親友レオン・ウエルトのイメージとも重なる。キツネは王子の問いに答えて、「銅いならや」 apprivoiser といふことばの意味を教える。apprivoiser は訳者によつて〈銅いならす〉〈なじみになる〉〈なつく〉〈仲よくなる〉〈めんどうを見る〉などのことばに訳されている。王子の「銅いならすってなんのこと?」という質問に、キツネは〈créer des liens〉と答えてゐる。それを、内藤は〈仲よくなる〉と訳し、他の多くの訳者は〈絆をつくる〉〈絆を結ぶ〉と訳してゐる。

〈銅いならし〉〈銅いならざれる〉と、お互ひが「たつたひとりのひと」「かけがえのないもの」になる。そして「お田畠まにあたつたような気もち」になり、「足音がする」と……音楽でもきいてる気もち」になり、王子の金色の髪が「すばらしいものに見え」、金色の麦を見ると王子を思い出し、「麦を吹く風の音も、……うれしい」ものとなる間柄になる。それが、友だちになるところであり、五感で感じる「目に見えない世界」がそれを証する。

また、そのような間柄になるには時間を費やす必要があるという。五千ものバラの花に会いに行つた王子は「あの一輪の花が、ぼくには、あなたたちみんなよりも、たいせつなんだ。だつて、ぼくが水をかけた花なんだからね。覆いガラスもかけてやつたんだからね。ついたてで、風にあたらないようにしてやつたんだからね。……不平もきいてやつたし、じまん話もきいてやつたし、だまつているならいるで、時には、どうしたのだろうと、やや耳をたててやつた花なんだからね。ぼくのものになつた花なんだからね」と言う。

キツネは王子との別れに際して次のことばを贈る。「心で見なくちゃ、もの」とはよく見えないってことさ。かんじんなことは、目に見えないんだよ」「あんたが、あんたのバラの花をとてもたいせつに思つてるのはね、そのバラの花のために、時間をむだにしたからだよ」

「めんどうみたあいてには、いつまでも責任があるんだ。まもらなけりやならないんだよ、バラの花ど

の約束をね……」

私は、この〈目に見えないかんじんなこと〉の中 心は apprivoiser（飼いならす）にあると思う。〈心 で見なければ見えないかんじんなこと〉が見えるよ うになるためにはお互いを〈飼いならす〉ことが必 要であり、そういう間柄になるためには〈相手のた めに時間を使うこと〉が必要である。時間をかけ、

その結果、相手が大切なものになることは、目には 見えない。心で感じ、信じ、行うことによって、初めて誕生する世界である。そして、その〈飼いならし た〉関係には、永遠の責任が伴うという。重い内容 が込められたことばである。

このように、「かんじんなこと」は、目に見えない」というテーマは何回も繰り返されながら、内容が深 まっていく。

そして王子はバラの花のもとへと帰路をたどり始 める。途中で、「スイッチマン」「丸薬商人」とことば を交わし、広い空間をすごいスピードで探し回つて も、時間を節約しても、大切なことは見つからない

こと、子どもだけがそれをわかっていて、ボロ人形 をかわいがり、特急列車の窓ガラスに鼻をぴしゃん こにおしつけているのだと考える。そして、王子が 一年前に地球に降りた場所、砂漠でパイロットに出 会うのである。

#### 4 砂漠に井戸を探す

王子とパイロットが出会って八日目。飲み水が一 滴もない状態で王子が砂漠の中に井戸を探しに行こ うと言う。不可能としか思えない提案だったが、パイ ロットはそれに従う。それはなぜなのだろうか？

「それでも、ぼくたちは歩きました」

「それでも、ぼくは□をつぐみました」

この、「それでも」「～にもかかわらず」相手を 受け入れること〔～だから〕ではなく)が「愛する」ということではないのだろうか。パイロットは王子 を愛しているから、一緒に歩き始めたのだ。

王子はパイロットに言う。「死にそうになつても、ひとりでも友だちがいるのは、いいものだよ。ぼく

はね、キツネと友だちになれて、ほんとにうれしいよ……」と。これは、サン＝テグジュペリが親友レオン・ウエルトに宛てた別れのことばであるようにも聞こえてくる。

そして、詩のように美しい」とばで「目に見えない」世界の中心に愛があることが示される。

「ぼくは、月の光で、王子さまの青白い顔を見ていました。ふさいでいる目を見ていました。ふさふさした髪の毛が、風にふるえているのを見ていきました。そして、いま、こうして目の前に見てているのは、人間の外がわだけだ、一ばんたいせつなものは、目に見えないのだ……と思つていました」

découvrir が使われているのは、探して見つけたのではなく、覆いが取れて恩寵のよう~~に~~井戸が現れたという意味であろう。

王子は「その水がほしいな。のましてくれない? ……」と言つて、パイロットのくみ上げた井戸の水をおいしそうに飲む。そして言う。「さがしてるのは、たつた一つのバラの花のなかにだつて、すこしの水にだつて、あるんだがなあ……」と。大切なことは、量ではなく、質の中にある。見える外側ではなく、見えない内側にこそ価値があるのだ。

## 5 王子との別れ

王子は、ヘビと出会つた恐ろしさに震えながらもどうれしいんだが、それも、この王子さまが、一輪の花をいつまでも忘れずにいるからなんだ。バラの花のすがたが、ねむつていてるあいだも、ランプの灯のようにこの王子さまの心の中に光つていてるからなんだ……」

そして、ついに二人は砂漠の中に井戸を発見する。

王子は別れに際して言う。「きみは、ぼくの星を、

星のうちの、どれか一つだと思つてながめるからね。すると、きみは、どの星も、ながめるのがすきになるよ。星がみんな、きみの友だちになるわけさ」と。一人の人を愛すること、一人の友だちを持つことは、万人を愛することにつながるというのだらうか。

「『ぼく、きみにおくりものを一つあげる……』王子さまは、また笑いました」

「星がみんな、井戸になつて、さびついた車がついてるんだ。そして、ぼくにいくらでも、水をのましてくれるんだ」

王子はパイロットとの絆の証として「笑い声」（五億の鈴）を残し、パイロットが飲ませてくれた「井戸の水」（五億の泉）を携えて、バラの花のもとへ帰つていく。王子の姿はもう見ることができないが、

パイロットやキツネにとつて、消えることない大切な友だちとして存在し続けている。

ところで、パイロットはヒツジの口輪の皮ひもを描き忘れ、ヒツジの口輪は役に立たないことになる。「あの王子さまを愛しているあなたがたと、ぼくに

とつては、ぼくたちの知らない、どこかのヒツジが、どこかで咲いているバラの花を、たべたか、たべなかつたかで、この世界にあるものが、なにもかも、ちがつてしまふのです……」

私たち読者と目に見えない王子は、ここでつながらざるを得ない。ここに目に見えない絆が用意されたことになる。作者、サン＝テグジュペリは「かんじんなことは目に見えない」というメッセージを最後まで響かせながらこの物語を閉じる。

「そして、おとなたちには、だれにも、それがどんなにだいじなことか、けつしてわかりっこないでしょ」と、大人の中に生き続けている「子ども」に語りかけながら。

#### 注（参考文献）ほか

- 1 内藤 灌訳『星の王子さま』岩波書店 一九五三年
  - 2 池澤 夏樹訳『新訳 星の王子さま』集英社 二〇〇五年
  - 3 稲垣 直樹訳『星の王子さま』平凡社 二〇〇六年
- \*ほかにも推薦したい新訳としては、次の二冊があります。  
小島俊明訳『星の王子さま』中央公論新社 二〇〇五年  
河野万里子訳『星の王子さま』新潮社 二〇〇六年